

「失われた百年」を超えて



左▶家族と一緒に
花火を待つ。静かな時間が
夜空を染めていく
(さいたま新都心を臨む
埼玉県の大和田公園周辺)

「飛行機が一つも飛んでいない空を見上げたとき、世界はこのままどうなってしまうんだろうって不安に襲われたんです」
六年前の秋の日のことを沢沢健さんは昨日のことのように思い出す。
米シアトルで足止めを食った沢沢さんは、独立し、子供が生まれたばかりだった。9・11同時テロ後の厳戒体制で不気味なまでに静かな空。感傷で済ますには、心はあまりに痛んでいた。

一九六一年、神奈川県生まれ。「日本の資本主義の父」沢沢栄一の五代目の子孫、などという自意識なく生きているわけもない小学二年生のときに父親の転勤で渡米して以来、大学を卒業し、MBA(経営学修士)を取得するまで米国で暮らした。
勤めたのも「ゴールドマン・サックス」など外資系金融機関。家訓で投機を禁じていた沢沢家に自分の生き方はあきらかに合わないのか……。折しも母国では日本を食い荒らすハゲタカ「批判の大合唱」。シアトルの空を見上げた日、「日本を金融で変える」決意は後の世代のために何ができるかへと一歩深まった。

物言つ寄付
沢沢さんは今、米国のヘッジファンドと組んで、資産運用によって生じる利益からファンドが受け取る成功報酬の10%を日本の社会起業家の育成支援に振り向けるプロジェクトを進めている。
これはいわば「物言つ寄付」。「何に使ってもいいから、ただけい、お金のインパクト(効果)は明確にしてほしい」
沢沢さんに言わせれば、日本のNPOや民間団体は「もうっただお金を使い切る」としか頭がない。だから、一億円あればこうする、といった事業拡大の発想がでなくなる。

「稼ぐが勝ち」は美しくない。では、稼いだお金をどうに使えば社会が美しくなるのか。この「気づき」があれば、弱肉強食が強調されがちな資本主義の世界に大勢の「子資本家」が生まれ、社会起業家にお金が回る。そのお金が現場で格闘する人を元気にすれば、彼や彼女が子資本家の輪に加わる。
新しい日本人
この特集には「気づいた人々」「新しい日本人」が登場する。最貧国の素材がしゃれたバッグになり、障害者の栽培するブドウが、その品質で注目を浴びる。ニートに分類される若者が仲間と夢を追う場を提供したり、会社に行かなければならぬ母親に代わって、子育ての終わった女性が病気の子供を預かったりするNPOには、沢沢さんのプロジェクトからそれぞれ一百万円、百八十万円が託された。

自由意志に基づいたボランティアな行動。その出発点には「こうすれば、もっといい世の中になる」「なんでもできるはず」という気持ちがある。志に酔わず悲観せず、成果は分け合う。
カウンセラーの資格を持ち、企業社会を見てきたフィランソロピー協会の高橋さんは語る。「会社で自分をさらけ出せない人が、会社の外のボランティア活動などで新たな自分を発見している」。それもまた「気づき」に違いない。かみ合った歯車は美しく。

「今の日本ってホリエモンかマザーテレサか、みたいになっちゃうでしょ」
日本フィランソロピー協会の高橋陽子理事長がつぶやいた。
「どう生きるか」で思考停止になったら、
「カッコいい大人なんか出てくるはずがない」。
ボランティア。それは忘れかけた自由な心の再起動。

「日本には投資家や資産家は少い」
藤野啓介